

---

# 紺 青

よしき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

紺青

### 【Nコード】

N9681B

### 【作者名】

よしき

### 【あらすじ】

海で出会った男と少女。男は死にかけていた。少女は人魚だった。悲しい、大人の童話。

遙かなる青い海を小さな、小さなボートが流れていく。

海の雄大さに比べてあまりにも小さすぎるボートは、木の葉のように揺れていた。

風が吹き、雨が降り、波に揺られ。

そのボートには男が一人乗っていた。

わずかな食べ物と、残り少ない水。

空を見上げたため息を付く。

もう何日もそうしていたのか、自分が生きていることすら分からな  
いまま、波に揺られている。

太陽も月も星も風も波も、全てを見ていた。

そして一人の少女も彼を見ていた。

波に揺られ、揺らされ。

繰り返し、繰り返す。

綺麗な月が波を照らす。

一面の青白い世界。

星々は競って輝いているけれど、月の光の強さの前には皆、ひれ伏  
すしかなかった。

ときおり風がボートを揺らし、すぐに飽きて空の彼方を目指して行  
ってしまう。

ボートを叩く波の音だけが世界を包み込む。

男はボートの底でじっとしている。

指先すら動かす事無く、月を眺める。

何故か涙が溢れてきた。

理由もないのに。

「…死にたくない…」

口にしてみると、その現実が近づいてくるようで、恐ろしくなった。

「誰かと、話しがしたい。」

また、涙が溢れた。

ぴちゃ。

水の跳ねる音が聞こえる。

魚が水面で戯れる音だろう。

ゆっくりと手を動かし、涙を拭く。

ぼやけた視界から現われたのは、ボートの外から男を覗き込む一人の少女だった。

慌てて男が身を起こすと、びっくりしたように少女は波に隠れてしまふ。

きしむ体を起こし、水面を眺める。

静かな波が月の光を反射する。

あたりは何もなかったように静まり返り、波の音だけが繰り返している。

夢だったのか。

黒い髪の少女。

ため息が空に消えていく。

ぴちゃ。

ゆっくりと振り返ると、水面に浮かぶ影があった。

じっと目を凝らしてみると、その黒い影の中から二つの目が男を見ている。

驚かせてはまた逃げてしまふかもしれない。

男は身動きせず、その影を見つめる。

ぴちゃ。

水音と共に影が近づく。

少し、また少しづつ。

思い切つて男は目を閉じる。

いなくなつてしまわないようにと祈りながら。

耳をすますと水の音はだんだんと近づいてきた。

ぴちゃ。

冷たい手が男の指に触れる。

その冷たい感触に驚きはしたが、手を動かさずに我慢をする。

小さな手が男の手を撫でる。

冷たくて柔らかい感触。

夢じゃない。

男はゆっくりと目を開ける。

少女は両の手で男の大きな指を確かめるように撫でていく。

男は声を発する事もなく、少女の顔を見つめた。

長くしなやかな黒髪。

薄い桃色の唇。

月を写す、けがれ無く輝く瞳。

彼女を見つめる瞳に気が付き、一瞬体をびくつかせるが今度は逃げ

る事はなかった。

綺麗な瞳が男を見つめる。

少女の指は男の存在を確かめるように、腕を、胸を、顔を撫でてい

く。

男もまた手を差し伸べ、少女の頬に触れた。

柔らかな感触に男はまた涙を流す。

二人はお互いに触れ合う。

月も、星も、波も、黙つてそれを見ていた。

少女は男のしなだれかかるとように、ボートにその身を横たえた。

ほっそりとした体は月の光に白く輝く。

下半身の尾びれはうるこの一枚一枚がきらきらと光を反射する。

にんげんではないもの。

それでも男は腕の中の重みと感触を嬉しいと思う。  
髪を撫でると少女は嬉しそうに頬擦りをしてくる。

もう二度と感じる事はないと思っていたから。

月も、星も、波も、世界の全てが涙で歪んだ。

それから二人は毎晩のようにボートの上で会った。

少女は言葉を知らなかったから、言葉を交わすことはなかったけれど。

お互いの体温と肌の感触が二人を引き合わせた。

始めは寂しくて誰でも良いと思っていたが、男はその少女だけに会いたいと願うようになった。

男はそつとためらいがちに少女の唇に接吻をする。

少女もまたそれに答えるように口を寄せた。

まるで流木の上で小さな小鳥がするようなキス。

二人は波の上でいつまでもそうしていた。

ある日の午後から波が強くなり、ボートはすごい勢いで流された。空一面の黒い雲。

吹き叫ぶ風。

何度もボートはひっくり返りそうになったが、波に翻弄されるままただ流されていた。

男は嵐の中で少女がくる事を祈った。

もしも来れないのなら、どうか無事でありますようにとも祈った。

嵐はますます強くなり、雨も風も波も男を叩きつけた。

男はボートの底で雨水を飲み、じっと耐えていた。

嵐は時間も、場所も、少女をも男から奪っていった。

どれくらい時が経ってしまったのか。

男は寝る事も起き上がる事もできず、雨に打たれた。

すると強い風の中から声が聞こえた。

「愚かな男よ。孤独な男よ。その死は運命。逆らう事は出来ない。」

死の恐怖から男は叫ぶ。

「うるさい！黙れ！黙れ！黙れ！」

両の手で耳を塞ぐが、その声ははつきりと聞こえてくる。

「人魚を食べてしまえばいい。死ななくなればいい。」

耳を塞いでも聞こえてくる声に男は恐ろしくなる。

これはもしかしたら自分の内から聞こえてくる声ではないのだろうか？

「人魚を食べれば、お前は死の恐怖から逃れられる。」

その声はますます自分の内からの声のように聞こえてくる。

「いやだ！俺はあの子を愛している！できない！俺じゃない！」

恐ろしい考えを打ち消すように男は叫び続けた。

「どうせ今だけさ。珍しいだけさ。食っちゃえば良い。」

いくら叫んでも声はやむ事はない。

「いやだ！消えろ！消えろ！俺の中から消えろ！」

男の声は風の音にかき消された。

「やめろ！消えろ！消えてくれ……」

男は苦しみながら気を失った。

遙かなる青い海を小さな、小さなボートが流れていく。

海の雄大さに比べてあまりにも小さすぎるボートは、木の葉のように揺れていた。

三日三晩嵐にさらされたボートはもはや漂う流木の塊にしか見えな  
い。

月の光の下をどこまでも流されていく。

音もなく、ただ流されていく。

近くの水面に少女が現われる。

急いでボートに泳ぎ着き男を見つめた。

男は動かない。

その指で少女に触れる事はなかった。

優しく微笑んでくれる事もしなかった。

少女は男を抱え上げる。

そっと接吻をしても何も変らなかった。

そして一粒。

たった一粒だけ、少女は涙を流した。

涙は月の光を吸い込み、輝きながら男の頬を流れる。

男は目を開けてはくれなかった。

少女は空に叫んだ。

声にならない、歌のような叫び。

誰もその声に答えるものはなく、ただじっと見守るだけだった。

男の重い体を抱え水中へと身を投げる少女。

胸に男を抱き、どこまでも潜っていく。

遥かなる海底を目指して。

どこまでも。

どこまでも。

それから月も、星も、波も、風も、二人を見ることはなかった。

<終>

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9681b/>

---

紺 青

2010年12月3日00時37分発行